新約聖書希伯來書

全

價三錢

02-SHI
海老澤文庫

02-SHI

耶蘇降生一千八百七十六年

翻譯委員社中
米國聖書會社

新約聖書希伯來書

明治九年

日本横濱上梓

使徒ポーロヘブル人へあてたる書

第一章

神むかしの預言者により列祖へつげたまひしが、この末の日にはその子によりてつげたまへり。神は萬物の嗣となし、この子をもて世界をつくりたり。三この子は神のさかえの光輝、その質の眞像にして、その權能のことばをもてすべてのものを扶持し、みづからの罪のきよめをなしてたかきところにおはしますいまの權威の右にさりぬ。四

名の天のつかひなるよりもまされるごとくなりたるゆゑんなり。五そは天使たちのうちなんぢは我

海老澤有道文庫

くいるや。なんぢらぶ子るうれ今日ゑんぢを生り
と。まこと我このものためよ父とるらんうまこいつぶたあに子
とるゑんべしと。まこと家子を世よいらしむるときよいひさ
まいるい。神のまべその使者いみるこまにひざまづくべー
まこと天使こちよつりそい。このまこその使者こちを風とゑし
そのつちちりのを火燄とるまこいくりいその子よ
いくるい。神よゑんぢの位い世々にあまびゑんぢの國の柄
いなしきつゑなりゑんぢ義を愛し惡をまくむ。こ
のゆゑよ神まるいちゑんぢの神いまろこびの膏をまて
ゑんぢの侶よりもまさりてそゑげり。また

いまこく。主よゑんぢ元始よ地のもとゑをあく。天もゑんぢ
ぶ手のエるり。こまちらいるびんさまどゑんぢらいつね
よ存ん。こまちらいまべて衣のごとくふるびん。ゑんぢこれ
らを袍のごとくたむ。まここのまらい變らん。さまとゑる
んぢらいゑることこまるし。ゑんぢの壽いをそまざるり。
天使こちのうちゑる誰よ。ゑんぢ敵をゑんぢの足凳
とせんとき まべそつぶ右よ坐むと曾ていひたまくるこ
とありしや。まべて天のつるもい救をつぶんとまるものよ
つくんあつちちる靈よあらんぢや

第二章

この故よつちまこ きしこころを流過ることる

うらんたるよいよく篤つとむべし。そもそも天使にようてつげたまひしことば。堅立してまぬかれがたきの違逆とあらざるべきみるの公正むくいをうけたらんまれ。このごとき大なる救をうるはざりにしていかでのがるることをえんや。斯いまだ主よりてあきらめられるをきくしものどもこれらに言證せり。神もまたその聖旨にあづかりて休徴と奇跡およびさまぐの異能をもてうちあらはすところの聖靈をもてこれらを證せり。五それ神はわれらがいふところのきたるんとする世を天のつかひたちに服せざりき。六ある篇に。人あしあていひけるは。人を誰とかしてるんぢこれを心にとむるや。人の子をなほしてるんぢこれを眷顧るや。七るんぢこれを天のつかひたちよりまさしくおとらしむ。うまたに榮と尊をこれにくわむ。八るんぢの手のわざをつくるものらんよこれを立てるんぢまたるんぢそのものをその足下に服さしむ。まぬかれる萬物をこれに服さしむ。まぬかれるものるんぢに服さしてのこるものるんぢ。されど今にいまだまぬかれらまぬかれのものいまだこれに服せしをみず。九たゞまたまぬかれ天のつかひたちよりまさしく微小されしものをるんぢ死のくるしみをうけしによりて榮と尊をこのむ

らさるる耶蘇をみくるり。そのきよらかなる神の恩によりて。
まことの人よりもり死を嘗つんがためなり十これあほくの
子を榮えみちびくんとてそれをまことの君をして苦難を
ありて成全しむるなり。まことのものゝ歸まるところ萬物を
つくれるものゝこのゆゑなることなり十一それきよむるものとき
まめらるゝものとまことの一まりいづ。このゆゑにわれらを
兄弟ととなるを恥とせずして十二いはくこれ
なんぢの名をつたふ兄弟にあめさん。なんぢを教會のうち
に讚ん十三まことにいはく。つねにこのれる依賴んまことに
れと神のつねにあるこゝにあるこゝ子をみよ十四そなたこどもつね

に肉と血とをそなへたるゆゑにこれまたそれ具へ。
られ死をもて死の權威をもてるものまたそれ惡魔をほ
ろぼす十五なほ死をおそれて生涯つねにくるしむものをすべて
んためなり十六實に天のつねひとをたすけんとしてアブラハムの
子孫をたすけ十七このゆゑに神に屬することにつきて矜恤
と忠義なる祭司のごとくなるべきなり民のつみをあがなはん
めに諸事にあらゆる兄弟のごとくなるべき宜なり十八そはこの
みずからいざなはれて艱難をうけたまはれば能くいざなはるる
ものを救助うるなり

第三章 このゆゑにあるじ天の召をうけたまはりしきよき

兄弟よ 二 モーセが神の全家にちゆうぎをせしごとく。あのれ
をしてしもべのよ忠義なるこをしるべき信ずるところの使
者なる祭司長なる耶蘇をふたつくあるべし。三 そして家をつ
くりしものの家よりまさりて榮あるごとく。このまも
モーセよりいまさりてはまもるべきものとせられ
たり。四 あらゆる家いとれをつくるものあり。萬物をつ
くれるものは神なり。五 それモーセは將來よしひつとられ
んとまるこの證をせんがためなり僕人のごとく神のぜん
うよりあつて忠義をなし。六 キリストは子なるものごとく
神のいへをつかさどれり。つつしみ信仰と望のよろこ

びとを堅くたもちまで。このつつしみたもつべしとそのいへ
七 このゆゑに聖靈のいはるごとくせよ。なんぢらもし今日
その声をきくとき野にあつて主をこころみしるひその怒
をひきしときのごとく。八 なんぢらこころを剛愎にまもる
なかれ。九 そのところにおいてなんぢらの列祖こころをこ
ろみしこころをためし。まこと四十年のあひだこの所行をみ
たり。十 この世のよもそのの代の人をいかりてこころをつね
に心まどへりといへり。さまどこの道をしらざりき。十一 ゆゑ
にこころをいきどほりて。このまもるべきものとして安息にいるべからざると
ちかひたり。十二 兄弟よなんぢらみな不信仰なるあしき

心をいごきて活神のまへよりたるべきことをうらん
やう謹慎べし。十三 るんぢらのうち誰ひとり罪のあきむき
よりて剛愎なるゆゑ今日とをるあるうちの日
々ねがひよあひ勧勉よ。十四 そのうれらのもとめの信仰
我をそうまでこのごとくなりもてぎキリストと與ものとるべん
主それ云ことあり。もし今日その言葉をきくぞ激怒を
ひきしときのごとく。るんぢらの心をかたくなにせる
なかれ聞てるほいうをひきしものいなまぢや。モーセ
よまさぐひて エジプト よりいでるまでそのものよあら
ぜや 十五 神ハ四十年のあひだ誰よむかひていかりしや。罪

我をかしてその屍を野よたおせしものどもよいかれる
るべぢや。十六 まさそのの安息よいるべからぢと誰よむかひ
てちかひしや。信仰せざりしものどもに誓るべぢや
十七 こゝをたよりてみまぢ。うれらが入ること我えざりしハ不
信よりてあり

第四章

このゆゑにつゝまさら畏懼べし。そのやをみよいるやく
そくに今もるるのこるものどもあるとくいまるるんぢらの
うちこゝに及ざるものあるんぢそれつとまさらもうれらがど
とく福音をのべつたへられたるとうり。たゞうまさらがきしと
らうの言てその信仰まざらざりしがゆゑに聞者に益

るうりき信ずることろのつれらい安息はいることをうなり。まるもち言たまひしごとく。つまり怒るときちうひて。この書のことばやまみはいるべからずといへり。しかるのちども地基をあきらかにときよりその工はみるなきもの。そのある篇は七日はつひて左のごとくいへり。神は第七日はまべてその工をやまめりと。五またこの篇は。うまるいとばの安息はいるべきものあり。さきの福音をつたへられたるものは信ぜざるよりていらぎりーあるとのゆるはひさしきを經てのちまたダビデの書はあひて日をさだめて。今日といへり。前にいひしごとく。今日もしそのこゑをきくむんだら心をかたくなるまるるれハもしヨシアクちをやまるべそのちち神はほろの日をいたぎろべしさるがやまみは神の民はのこるまり十まぢに安息はいりしものは神あのまのつぎをやまるしごとくこのまもそのエをやまめり十二このゆるるのれらのごとき不信仰はるうひくはざるやうられこのやまみはいりんことをもげむべし十三それ神のことばは活てうの能あり。りろもの剣よりもとく生氣と靈魂まさふしぐ骨髓までとほしるうち心のあやひとこころざしを鑒察ものあり十四まこと物はとして神のまへはあらも

れざるべし。ときらぶこのるまもるものゝ眼のまへよまべ
てのものはぐろうへあらそるさまびいられらに雲霄を
とほりてのぼりしあはいみる祭司の長。まるもち神の
子耶蘇ありゆゑよりまら信ずるところをしへをうさ
くだりつべし。十五そへられらぐ荘弱をあるひゆることあら
ざる祭司のをきいられらにあらだ。うまいまべてのことよ
りまらのごとくいざるれべるまど罪故をうくさで つまき
十六このゆゑよりまら矜恤をうけ機よあふたまけとるる
恩恵をうゆんうめよ毅然しめぐるの座よきてる
べし

第五章 人のうちより取らまるまべるの祭司のをきい。
ひとのためよ神よ屬ことを任ぜられてつるのそるへりの
と犧牲をさべるこをまるのるり。二あのまみぐうら
荘弱よまとそるまびまるあるうるるまへるものをあれ
むことを得るり。三こまよりて民のためよるまごとく。
あのぐためらも罪のさべげるをえば。このの
尊ハアーロンのごとく神の召をうけるのよあらざれば
みづからこれをとるものるし。五このごとくキリストもみ
づからたふとき祭司の長といるあらざりきるんぢい
まの子まま今日るんぢをうありとひしものの彼をた

ふるみて きるるせり六 まるほうの篇よ。るんぢふのきうる
くメルキセデクのくらるのごとき祭司くうといひうまへる
がごとく七 る肉體よあり〜とき哀哭るうごをるが
〜て死よりあの生をまくひうるものよいのう。まる懇求
をる〜。その敬畏よりてきうるこをえうられず
たまうども受るうるくるる〜みよりて順服うをる
らひ九 までよ完全けまびまびてうまに為うがふりの
永救ののとるまり十 るまハメルキセデクのくらるのごと
き祭司のをきるりと神よとるへられきこれよつきて
るまらあるくのうるべきことあまど。るんぢらが耳

よふきよりて講明ぐ〜十二 まをぐよるんぢらハ時をふる
ことひき〜けまぐ人の師とるるべきものるる今まる
神のあ〜たまへる教の端緒をくらまざるをえぐ。
るんぢらハうるき食物るうで乳をりちるべきものとる
まり十三 あるよそ乳をのちるるものハ赤子るまび義よつける
をぐ〜へよ熟せぐ十四 それうるき食物いころをえうるを
練て善惡をうきゆへうる成人のりちるるものるり

第六章 このゆるようまらキリストのをくへのをぐめを
ちるれ。死行のくるあうるめ。神よつける信仰ニさまくの
洗の禮。まる手をあくうこと。死〜人のよみぐり。かぎりる

き刑罰。これらのをしへのりとあらふべあくらをせぎ
して完全よまをむべし。三 神ゆるさべつをきらこてまを行
んぷそいひとしび光照を元天のたまのをうけ聖靈をう
むり五 神のよきこしとぞと来世の權能とをあぢそひて
のち六 墮落するものの神の子をふしび十字架よつけて
顯辱とまそるがゆゑよ。まこらまを悔改よたちへらまそる
ことあしそぞるるりそ是地あむくそのうへよふまる
雨をまひこみて耕者のためるべき菜蔬を生ぜ神よ
うめぐみをうしへきれど荊棘とあざみを生ぜまそら
れ。ろの詛よちしくそのまていやうべし。九 愛まるものよ。

ヨまをら如此いへどるんぢらこまをたまさまるらと即ち
まそくそよちうきこしをふうく信ぜり十 神いるんぢらぶさ
きよ聖徒よ役事いまもるはこれよつふるその功勞と
聖名のためよあらしあそその愛をいまそ不義るるの
よあらを土るんぢらあのく終よいるまでらしぶひをい
ぶうぶる望をたのしんがあるよ以前とあるぶそげみを
あらそし。あこしらぶそして十二 このの信仰と忍耐をもそや
くそくを嗣るものよるらをそんらとをいまら ねぶへり十三 そ
を神ハアブラハムよやくそくまそまひし。ときに。自己より
あはいるるものの指てちうふべきるきぶ ゆるよ者のまを

さて誓いひとまひけり。つまるんぢを大よめくまん。
まるんぢの子孫をあわのよ益ん十五このまあのびてくめ
ごとく約束のものをえとりき十六あほまを人をあのれよりを
ぐれなるものをさてちうふ。まこ事をさぐもる誓ハまべ
てこのまらのあらそひをとぐもりなり十七まこが神ハやく
そくとつぐものよ。その旨のこのちらざることをいよく
表さんとしてやくそくのらへよまこ誓をうてうまんう
十八神のいうることあうそぐるこの二件のこのちりるきこ
とハ。前よりうところの望をとらんとて怒をのぶれるを
まらをるぐさめんがためるのり十九これらぐこの望ハなま

あひの錨のごとし。堅固しそらぐを慢のうちよりて
まらのうめよ耶蘇さきぐけしてそのとろるいうメルキセデク
の位のごとくかぐりるく祭司のをきとるまり

第七章 このメルキセデクハサレムの王まそいとうき神の祭司
るうしぐ。アブラハム王たちをうろうとうきこのれアブ
ラハムをむうて祝せり二アブラハムこれるまぐて所獲の十分
の一をとりけで義の王つぎるサレムの王
とうこれまるうちち平康の王なり三このれハ父なく母なく
族譜なく生のたぐめるくまをうもるし。神の子ま
うぐまてつねよ祭司うきき四先祖アブラハム所獲のも

つてもよきものゝ十分の一をもそなへあたへられがその人のいろを尊うをあらべゝ五レビの子孫のうち祭司のつとめをうけるものゝ律法よりもうけづひて民まるもちその兄弟より十分の一をとることを命ぜらる。うまれらゝアブラハムの腰よりいでらるものとゆへどもるは然るせり六されどもの血まちよあらぶるこうまれゝアブラハムより十分の一をとりてその約束をなのるものを祝せりさあるまるものゝまきれるものゝ祝さるゝ論るきることるり八こゝるる十分の一をうくるものゝ死べきもの。このゝこゝるゝ活ものるゝ證せらまてゝりルまゝ十分の一をうくることゝるのレビもアブラハムよりて十分の一ををきあらうといべゝ十そゝメルキセデクがこのまゝよあるるときレビもその父の腰よをまびるり十民ハレビのまちぎるる祭司の職よりてづきて律法をうけうゝ。ゝらの職よりて完全ことあらば。るんぞはるよアロンのゝらるとゝるへざるメルキセデクの位のごゝき祭司のゝゝることをゝとめんや十一まぞる祭司のまちぎこのゝるるときゝ律法もまゝかるゝまこのゝゝべゝ十二こゝまらのゝゝゝ祭壇よつとめたるものるゝき支派よ屬ものをさゝまゝそゝゝり十三をまゝらゝが主のユダよりいでゝゝゝゝとゝゝあきゝらるゝり。モーセゝらの支派よついて祭司の職のゝゝゝるをゝいもぎゝき十四をぞよ

メルキセデクのごときはらの祭司あらうまでも律法のうを
ることもいまくあきらけし　十六　このまい肉體よりのくるあき
その法ヨあらぐひてたくぎ。くちざる生命のちからまる
ぐひてなりたる　十七　そのメルキセデクのくらゐのごとくるんぢ
かうぎうるく祭司うと證せられうまぐるり　十八　そまき
律法いるよごとくもまつうとうせくとうろるし　十九　らの
ゆゑよさきの法度いそのよりきと益るきをのて廢せら
れ。さらよまきれるよき望をたてられうつれらこの
望よりて神よちかづくことを得るり　二十　二二　みの人々い
ちちひるくくて祭司とるまぐ。うれい誓をのて祭司と

るれり。これ主ちうちうきちうひをうて。るんぢい　メルキセ
デクの位のごとくうぎうるく祭司うとうれるものよ
るこのくのごとくく耶蘇いちうひよあらざまぐ祭司とる
らざるほど尤もよきけのゆくの中保とるれり　二三　うれい
死あるよりてるぐく存うとあうぐ。ゆゑよ祭司とる
りうるのあほううき　二四　されど耶蘇いうぎうるく存ゆ
るよるうとるき祭司のつとめをのてう　二五　このゆゑよう
れいあのれよりて神よきうるのくなめよ懇求んとて
つねよ生ぐ。このれらを全まくひうるり　二六　のくのごとき
祭司のきういうれらよ當るりのるり。このれいきよくくて

不善ことごとくけがれるまで罪人よりほぎうきう。その
天よりもたかく　二七　まことの祭司のききちのびとく。ま
づあのまの罪。のち民のつみのためよ毎日いけにえをさ
ぐべきよりも。そいまぐよ一ぐひあのまを獻てらを
をるせべるり　二八　それ律法いよりもき人をたてる祭司のを
きとるせり。されどあきそのあとちの誓のことぐい永遠き
つうき子をうそうそうり

第八章　つぐいつるところの肝要いこのごとき祭司の長
のうれらよあることとるり。このまい天よあのく大るもの
位の右よぎ〜く　二九　聖所よつうふ。まるもちち人のたつるところ

よあらぐ主のたてうまへるところの真の帳幕るり　三　まべ
その祭司のをきれ立られるい禮物と犧牲をさぐるれ
めるるげ由るよ。このれもまこのるべ獻ところのものあ
べ〜四うまも〜地よをらげ祭司とるべうぐ。そいまぐ
よ律法よ　五　ちぐひくそるくものをさぐる祭司あまべる
りこのまちげつうるところい天よあるもの狀と影るり。
モーセ帳幕をつくらんとせ〜ときに。るんぢ謹慎てまべて
のことをるまるい山よあのそてぐるんぢよあらもせ〜
ところの式よちぐふべ〜とあきれうり〜ぐと〜　六
きれど今うまいまきれる約束よりとづきそたそぐれたる

契約の中保とする。かゝるごとくこのれいまぐまこする職を
えゝりそいたゞめのけいやくもこのゝること多くばのの
ちの契約をたつることをりとめゞへその虧ところをうれ
らにあゝたゝしく云主いひたまひけるは、つまこイスラエルの
家とユダの家よ新約をたてゝ全備まるの日きたらんこ
の約はつまこ手をとりてうれゝらの先祖をエジプトの地より
みちびきいゞせる日よたてし　ところのごとくにあらず
そはうまこらつゞ契約よをゝぎつまこうれをこのゝり
みぎりゝゞゆゑなり。と主いひたまひしとり十まこ主いひ
たまひけるはその日のぬちつまこれイスラエルの家よたてん

まる契約はこれまこるなり。つまこれつゞ律法をその念よあき
まゝその心よあらはさん。つまこよのまこらの神とるなりこのれら
つゞ民とるべゝ十一おのゝくその邦人とその兄弟よをゝ
へそ。なんぢ主をしれとまゝさいたゞ。そは小より大よいた
るまでらゞゝくまれをしらん十二つまこれらの不義を
あはれみその罪と惡をまゝこゝろるとめざまこびるなり十三
あれまこでる新といひゝいたゞめのものを舊とまこる
なり。それふるびてあるものは殆ときまこうせん
とて

第九章　たゞめの契約よりまこりの禮儀と世よつける

聖殿とあり二設くるまくやを聖所とるべくぷちよ
燈臺と案とそるへの餅あり三まくと第二の幔のうしろの
まくやを至聖所とるべく。こゝに金の香鑪とあまねく
金をあはひ契約の櫃あり。このるらよマナ茂をさめさ
る金のつぼとアロンの萠芽杖とふたつの契約の碑あり。五
らくよい贖罪所をあはへる榮耀のケルビンあり。今こゝまらよ
つひてつまびらよいそぶ六このくのごとくこれらのものを
でよそるそり祭司たちいつねよ帳幕よいりてまつりをる
せりとあくるる幕へを祭司のをきのを年よひとゝびいまど
血をとりてしそいりとゝるべ。こゝまあのまと民の徳の

うめよさゝぐるるり八聖靈られをりてまくの帳幕のるはむ
りしゝきい至聖所よいりべきみちのあらそれざれしゝを
ちめまを九このまくやい當時のゝあよまうけられゝる表式る
ま。こゝまを ちゝひとくさゝげる禮物と犧牲ハそのまろ
まるものゝ良心をまつゝうまるとあゝをざうきこれらい
たゞ肉體よつける儀文よゝて食飲まゝさまゝの洗滌とども
よちゝまらんときまを負せられたるのを十一今キリストまを
よいゝまり。このまいきゝうんとまる嘉事の祭司のをきまゝ
て。手まをつくまる帳幕まをまるをちちこの世よ屬るところの
ものるらぬまゝりたるあはいる全備まゝやよより十二羊

犢の血をのちのぞをあのゞ血をもて一次きよきところよりて永遠あがるひをるをしらしをえそうり十三り〜活織よそぎて牛および羊の血まゝ焚るそうきめらゝの灰ゞ肉體をきよむるこゝをえそを十四まゝそあぎりるき靈よりヒ瑕るゝゝしゝあのまゝを神よさてげゝ キリストの血いるんぢらに活神をまつゝせんがためあ死のあとるひをさゝしめそのゝゝろをきよむるこゝをせぎゝんや十五このゆゑよこのれい新約の中保となるまう。これをじめの契約のゝきよ犯せるつゝをあがるかべき死あるよりそめされたるものゝうぎるあき世嗣の約束をえんがゝあるり十六あほよそ遺書あるときふこのゝうをこれをあるせゝものゝ死たることをあゝちきどるをえをそれ遺書ハこれをあるせるものゝ活らちハまそゝのカあることるゝ。その人あるそのちこのゝうるなり十七このゆゑよちどめの契約も血るゝゝそんたそざうき十八モーセあきそよあゝひて諸誡をまべそのの民よつげ犢と羊の血および水をとりそくゝもるるの毛と牛膝草をもて書とまべそのの民よそゝぎて云十九これ神のるんぢらに命じたまへる契約の血るり二十まゝこのゝのごとく血をのそきまゝとまべそのの祭器よそゝげり二十一あるよそ律法よるるにまべそのものも血をのそきまゝあらる。血をるがをことあゝ

きれゆるさるゝことゝなる〜三このゆゑに天にあるものゝ
このゝとりたるものゝこのゝちにらばこゝをもてきよめられし
うゝど。天にあるものゝこゝをもてうゝよりもまさりたる犧牲をもて
きよめらるべきなり二四キリストは眞のものゝ模なる手にて
つくりたる聖所にいらずして。いまより永遠までゝらのために
神のまへにあらはれたまんとて眞實の天にいりぬ二五まことの祭司
のをきての年ごとに他のものゝ血をもてきよめきとは
こゝろにいるごとく屢あのれをさゝげることをせざれば二六もし
あらばこのれ世のもとゞめようこのゝちあまたく苦難
をうゝべきなり。されどあのきたを犧牲とるゝて罪をのぞ

うんがためにいま世のまつゑにひとゝびあらはれたり二七一ゝ
び死てのち審判をうくることゝなるごとく二八人もさゝげまつることゝなるう
ゑ一のゝキリストもあまたくの人のつみを負んがためにいま一ゝび
いでまたゝとせらる。このれは罪をあがなうことなくあのきたを
望むものにふたゝびあらはれて救をほどこしたまふ

第十章 律法はきたるべきことゝの影にして眞
との形にあらざれば。年ごとにたゆまずさゝげるところ
の祭物をもて神にきたるものをつねに成全することあ
たはず二。もしまことにうまるることをえば獻祭のため一たびき
よめらるまゝに罪をあぼえざるゆゑにさゝげることを

止ざらんや。三 さきとど年ごとにこの祭をみもちようとつ
をあぼめることあらもちるり。四 これ牛と羊の血をつゝをの
ぞくことあれもぎるよりる。五 このゆゑにこの世よきる
ときいひけるに。ゐんぢ犧牲と禮物をこのまぬたぐもがゝ
さめよ肉體をそなふ。六 ゐんぢ燔祭と罪祭をよろこぶだ
そのときつゝ言いひけるに。神よつゝ言ゐんぢの旨をあるゐ
ちんとそきゝる。まるもちつゝ言よつゝて書よ言るされう
八 前よりいけまへとそなへのものと燔祭と罪祭まるもちち律
法よ言ゝそひてさゝぐるものをこのまぬまゝよろこぶだ
といひ。九 のちよい神よつゝ言ゐんぢの旨をあるゐんとそ

きゝ言ゝりといふ。その後るものをたゝんだめよその前る
りのものをのぞけり。十 この旨よりるひてつゝ言ふきゝまめらるこゝ
耶蘇キリストのひとゝびおのぶ肉體をさゝげ〜によりてるり
十一 まゝべその祭司ハ日ごとゝよりたちて奉事をる〜。ひさゝつゝ
をのぞくことあるゐざるあるゐ〜いけまへを言ゝくさゝぐ
十二 されどこのひとゝ一次つゝこのゝめよひとゝのいけまへを
さゝげてゝきりるゝ神のゝぎよぎ〜。十三 その敵をあ〜ぶい
とるゐさんときをまゝそり。十四 それのれ一のさゝげものをもて
きゝまるものを永遠まつたゝうまれぶるり。十五 聖靈まゝて
まゝゝにこれを證ま。そこゝの日のゝちいつゝ言ゝとたゝん

とまる契約ハこれまでのりとしへのちの主しひたまへく。そ
が律法をそのこころの置そのありひの書しまたその
罪と惡とをつぐこころのめじとあるぶゆゑあり十八
これらのゆゑ〳〵あらんまゝ罪のゝために獻ることなく。
るべし十九このゆゑの兄弟よつてまつ耶蘇の血によりてその
つまづきのためのひらきたるあゝらゝき生路よりも幔る
その肉體をとほりてぐらぐらして至聖所はいることを得。
このつ神の家をつかさどるあはいるの祭司あまべ三
誠實のこころと疑をいだくざる信仰をたのち心のあゝき
ありひをそゝぐまきよきみづをりて身をあらはれそち

ろづくべく三まこといひあらはしたところの望をうじくさだ
しそこのくまもるべし。そハ約束せしものハ誠信なるをみ
り二四つれらたがひに顧て愛心と善行をそげまし二五會集
をやめるある人のふこと。ことにあひまをめそのこと
日いよくちかつをみてまもくこのごとくるまべし
二六もしつれら眞理をさときれしのちるはるしまく
に罪犯をつさべつをあがるふいけまあることく
二七たゞあそれて審判をまつこと仇敵をやきらくきん
とまる烈火のこのるるり二八モーセの律法をぶつるもの。
もし二三人の證あらゝゞあそれまるこるくしそ死べ

し[二九]まして神の子を蹂躪みづからきよめらるゝけい
やくの血を尋常のものとする。まゝ恩をほどこして靈をあ
るどるものゝうゝべきその罰のあるきことをいうだろりとお
りふや[三〇]主いはく。仇をむくゆるつれみありうるをゆ
べし。まさいはく。主その民をさだらん。このくらいくるものを
つるまつらふ[三一]ある活神の手よりあちいるふあそうべきことを
り[三二]るんぢらむゝ光照をうけ〳〵のちあはいるる若
のたぐらひをあのびたり〳〵日をあのひいづべし[三三]あるひふ
詬誶と難辛をうけ人よみものゝごゝくせられ或いゝる
こゝとにあふものよ與ることをるせり[三四]そふるんぢらを

ゲ繩縛よあるをおりひやり。まさあのがうあるよ天よあいそ愈美うる
つねよりつぎのちものあるをあり。人のるんぢぶ業をうだらんと
まるをのよろとびてうけたり[三五]このゆゑよるんぢらのおはひるるむゝ仇を
うゝべき信仰をるげまることとるふれ[三六]るんぢらこのるゝにのちる
べきものの忍耐るり。これ神のむねをあるひて約束のものを
うけんがゝめるり[三七]いまあだぐらゝくありてきゝるのきさ
らん。このるゝらだあそうらだ[三八]たゞゝき人ハ信仰よりて
生べゝるゝあうだぐゲたまゝひこれをよろつゝびと
せゝだ[三九]さきだつまつら退縮てはろびよあよぶべきものよ
あらぎ。信ゝて靈のまゝひをうべきものるり

第十一章

それ信仰いのぞむところをうけとるところを憑據とするものなり。いまだみざるものをいよいよ人これをよりてほまれを得たり。三もろもろの人これによりてのちの世界に神のことばをつくられ。如此ゆるところのものへ見べきものによりてつくられざることを為る。四信仰によりてアベルはカインよりまされるそなへものを神にさげたてまつりしきものと證せられたり。その神その禮物についてあらはしたまへるなり。このれ死ぬまでも信仰によりて今なほものいへり。五エノクは死なざるべきようにされり。神にをうせしによりて人にぞきらとをえざりき。このれいまだうつされざるさきに神によろこばるるものと證せられたり。六しんかなくば神をよろこばせることあたはず。そは神にきたるものは神あるを信じ。つつ神はたづねあるものをとむるものに報賞をたまふものなるを信ずべけれ。七しんによりてノアはいまだみざることの示をこのむり敬畏てその家族をまもるために舟をまうけたり。これによりて世の人のつみをさばき。また信によりて義をうくべき世嗣となるべきなり。八しんによりてアブラハムはそのうけつぐべき地へゆけとの命をうけむり。こたへて出でゆくところを知り

びとをいでたりしこのれきさんうにより異邦にあつがごとく約束の地にゆきぬ。あるじやくそくをあひ嗣るイサクヤコブとともに帳幕にをりしかれも神のつくりいとなめるところの基ある京城をのぞめばなり十一さんうにようてサラもまたねをゆきうるこちからをうけ年邁しうどもみごもりうあり。これゆくそくせしものは誠信ありしまろれびなり十二このゆゑに死たるものごときひとりより天のほしのおほきと海邊のまるのうぞくごときぞかぎりなくうまれいでたり十三これらはみな信仰をいだきて死れり。いまだ約束のものをうけざりしがちるるふこるまをのぞみてよろこびて地にありてをみづからを寄寓旅なりと寄寓あるものはふるさとを家郷をたづねることをあらはせるなり十四もしそれらのものはそのいでしところをおもはばかへるべきの機あるべしかれどもいまはさらによりまさるところ天にあるところをおもへり。このゆゑに神はその神とよばるることをはぢとせざりきそれらのために京城をそなへたまへればなり十五

あんらうによりてアブラハムはこころみらるるときイサクをさげたり。この人はこの約束をうけしものなるがその獨子をさげたり。この子によりてなんぢの子孫イサクによりて

てとるべからざるべしといまされこうき十九このれあるべからく神に
死ようこれをいきうべしりうとまるべき死ようう
をうけしがごとくるうき二十信仰よりてイサクはきこう
んとまるこうとつのそヤコブとエサフを祝せり三まんう
によりてヤコブはまるんとまるときヨセフのふうの子
を祝しまるその杖のうへうらによりて崇拝うをるせ
り三まんうによりてヨセフはまるんとまるときにイスラ
エルの子孫のエジプトよりいづるうにつのこのこう。まる
あのゞ骸骨のうにつのこのこう命じたり三まんうにより
て父母はモーセのうまれうるときそのうるそうき子ま

るをみて三月のあひだこれをこのこう。また王の命をも
あそれざりき三四まんうによりてモーセは成長しうときパロ
のむすめの子とよもうるをいうるこう三五まだうこう罪の
そのこうをうけんよりはむしろ神の民とともるやう
をうけんこうをよしとせり二六キリストのこうめようる
誇譽はエジプトのたうらよりもるは寶貴とあるへうそは
報賞をこうとめてのぞめるう三七まんうによりてこのれは
エジプトをそるれ王のいうをあそれざりき。これ見さる
うのをみるゞごうくたへまのべるう三八まんうよう
てうまん逾越節と血をそそぐ禮をまりまう。そは長子

をはらをもの〳〵この書〳〵よふれぎらんがこあるり二九
んこうにようてこの書〳〵紅海幾をるのごとくいちこうしう
エジプトの人へこと書をこそらんとしてあばき死こり三〇あん
こうにようて七日のあひだエリコの城をめぐりこるる遂よ
そのい〳〵づきこづきこう三一あんこうにようて妓婦のラハブ
も信ぜざるものとともにほろびざりき。そい偵者を接て
こうきをやきこらるる〳〵めしこきだるり三二つこきさこるよ
をいきんや。も〳〵キデオンバラクまこサムソンイピタダビデまこ
サムエルおよび預言者こちのことをいきんよい時ここぐるるり。
三三これらきんこうにようてこくみくを服し。義をあこるむ

約束のものを元。獅の口をつぐみ。火勢をけし。やいばの
刃をのがき。よわきこよりこて剛強せられ。こうひよあいて
いきこ〳〵く。異邦人の陣をありぞうせこう三五婦もまこき
よこうものこ復活をうけ〳〵こらこあり。まこある人いわ
こも愈美よりみこのこうをうぐきなめよ酷刑られてゆきこる
こうここのまぐりき三六まこあるひこあざけりこうけ。む
ちうこれ。縲紲と囚獄のこるしみこうけ三七いこそうこれ。
鋸よてひうれ。火よてやうれ。刃よてこうされ。綿羊と山羊の
このこをきて〳〵あるき窮乏しこて〳〵こるやこくこるめり三八世いこれ
らをあく〳〵よこへだ。のれらい曠野と山と地の洞と穴とに

きよよひくとり三九こゝろにみる信仰によりてはまゝをえ
これどもやくそくのことろをえざりき四そこのれらもつ
まらいと偕るらざれば成全まるこゝとあらざるなめよきち
にまとれるものを神あらうらめつゝまらに備なるへかり

第十二章

こゝのゆゑよりてゝまらかくあはくの見證人よ雲のご
とくこのこゝまれこゝまるぞ。まへくそのの重負とまどへる罪をのぞ
き。たへちのびてつゝまらのまへよ置まこゝる馳場をそこり
二耶穌まこゝるこゝち信仰のみちびきとるこゝそこれを成全まこゝる
ものをのそおべく。こゝまらそのの前よあくこゝろのよろこ
びよりてそのちぢをもいとゝそこで十字架をちのびて神

の座のみぎよさ〜ぬ三るんぢら儀つゝれてこゝろをこゝる
ふこゝるらんこゝめよ。惡人のこゝあのまにさらもく〜を
もちのびこゝるものをあるふべく〜四るんぢら惡をあくそた
ふせぎていまだ血をるゞまたいこゝらば五まこゝ子よつぐるが
ごこゝくつぶこゝまひく〜言をるんぢらつまれこゝりいそく
そゞ子よるんぢ主のこゝら〜めをこのるんぢるゝれ。その
いまく〜めをこゝらこゝ心をこゝるゝれそこ主その愛
まるものをこゝら〜め。まこゝさまべそその納こゝろの子をむ
ちらこゝりこゝるんぢらめ〜こゝこの徵治をちのぢ神い子のご
とくるんぢらを待るゝ。こゝれゝ父のこゝ〜めざる子あ

らんやへまぐそのの人のうくることらしめ。りゝるんぢらよるく
ぐそのの私子にしゝて實子よあゝもぢゝまれつゝまゝくの肉體のち
いつゝれゝをこゝらしめしものるよるほこゝをうゆきくゝう。
ましゝて靈のちゝに志ゝぐひて生をえぐるべけんや十にくゝさ
いの父いその心よまゝるゝん志ぐらゝくゝまゝらをこゝらしむ。されゝ
どなまゝしひの父いつゝまゝゝに益をえゝさゝめてその聖潔よ
あゝぐゝらせんゝぐゝめこゝゝむることをるを十まぐその懲治い
まゝよゝろこゝぐゝゝのゝらゝだ。このゝゝゝゝ憂愁とありゝる。されと
のち こゝまゝにゝゝゝ鍛錬さるるものゝゝ義のあゝゆゝるゝ果
をむまぐせう十このゆゝるよるんぢゝらるくゝる手ゝゝゝゝゝる

膝をまゝこゝゆゝにせよ十三足るくゝるものゝまゝふこゝゝるくゝゆ
されんゝぐなめ。るんぢゝらのあゝゝよ平直るゝみちをそゝるふべ
ゝゝ十四るんぢゝらまぐそのものゝと和睦こゝゝをゝるゝ。みゝゝゝゝき
ゝゝゝゝゝ

きらくをんとせーの得てとあるとぞりーふるんぢらのー
るとろろるり十八るんぢらのちらづけるとろふ押べきやま
よあらば。あるひふのーぢる火。あるひふくくくる。あるひふ
黒暗。あるひふ暴風。あるひふ籤のあと。あるひふ言語のこゑ
ゐもあらば。この聲をきてーものをふてびこーとぐとも
てこーりたまをぞることとをねぐへう二十そふ獣さんへもー山
よふまるぞ。いーをてうるべーと命ぜられーを。このれら
ものぶことあたをぞりーふるんぢらのー
極てあるーりけまぐモーセも。とをいーくーあるを
をのーけりといくり三されどるんぢらのちらづけるとろ

いションの山。まさ活神のしーるる天のエルサレム。まさ千萬の
衆まるるち天使のあるまり三天よまるされるる長子ども
の教會。まさまべるのものをさるぞく神。あよび。成全せ
られたる義人のたまーひ血新約の中保る耶蘇。あよび
そーぐとろの血ゐり。この血のいふとろをアベルの血
のいふとろよりもまきれり二五てーみて告示
とろのものをこぞむゐれ。ゐーー地よりあめるのの
をこぞみーこのまらまぬるることゐりーるるぐま
しーてまら天よりあめるものをこぞみてまぬるる
こをえんや二六むるーいそのこゐ地をるまるせり。今を

くをつげていはく。つゝをまくさひとゝび地のそこるゝを天を
もふかそん。このまゝ一次といふる。ふるそるべきものゝを
てられんことを志めを。こゝをまらのつくられてゝ震ふれ
ざるものゝ存んためるり。六このゆゑよつをまらふかそれ
ざる國をえられず。恩よろんじて虔誠うやまひ神のみこゝ
ろにゝるふとゝろをのべこれよつゝふべゝ。九そをつゝれらの
神のやきつゝを火ゑり

第十三章　ゑんぢらつねよ兄弟の相愛まるこゝろを存べゝ。二
たびゝを接待ことをつゝまるゝれ。ある人ゝくるゝた
まぶ志らずして天使をのてるせり。三おのをとのにとゝを

ゝがごゝゝ囚者をおもへ。ゑんぢらものまゝ身よをゝるゆ
ゑよくるゝむものをあのふべゝ。四ゑんぢら婚姻のことを
をまぶそたふゝめ。まゝ牀をもけがをことゝるゝれ。神ハ
苟合まゝ奸淫をゝるものゝつゝみをさゝむべゝ。五ゑんぢら世を
つゝるに貪ことを世を所有をのそなをゝをよ。それゝれ
ゑんぢをさゝらばさゝにゑんぢをすそぐといひをまひさ
まぶるり。六さまぶつゝゝ毅然ゝといふべゝ。主をれをた
まくるものゑまぶをあそをまるゝ。人つをまにゑにをゝるのき
んと神のことぶをゑんぢらにをゝへゑんぢらをみちび
くものをあるへ。そのあこゑのひの果をそその信仰よゑらふ

べし。八耶蘇キリストいきのふもけふも永遠にかはらざるなり。九さまざまなる異端ようどうさることとなれ思ふようにこころをうばはれ飲食ようざるべし。飲食によりておこるひとりの益をところるうりきを きらに祭壇あり。このうへのものを帳幕につかふるひとにくらふことをゆるさるなり。十祭司のをさ罪をあがなんがためにけものの血をもつてきよきところに入る。そのけものの體を營外にやけり。十三このゆゑに耶蘇もおのれの血をもつて民をきよめんがために門のそとにくるしみをうけしなり。十四されば我らもこの營のそとにいでて

このれにゆくべし。十五されば我らはつねにあらたまるべき城邑なし。たゞきたるべんとするみやこをもとむ。十六このゆゑにわれらこの身をもつてつねに讃美のまつりを神にさゝげべし。また善をなすことと施捨をなすことをわすれるなかれ。かくのごとき祭りは神こゝろをよろこばるなり。十七なんぢらを導くものに服せよ。これらはなんぢらのこゝろを神のまへにおいて陳訴べきものなるゆゑなり。なんぢらのうまれひのこゝろをもつてしたがへ。まことにこゝろをもつてするなかれ。これなんぢらにとりてゆゑなきことなるべし。十八われらをもつてゆるせ。われらはまことにこゝろをもつてすべてのことをなすことをねがふなり。十九なかんづくなんぢらにわれをゆるくべし。

益るゝ　十八　なんぢらされらのためよ祈禱せよ。こゝろよ
きこゝろありてまことのことに善行をなさんことを
を信ずまことびるり　十九　されるはもまみゆるにるんぢらよ歸
らこゝをえんがためよるんぢらのいのちんことをきこゝに求
平　ねがゝくはこのぎりるゝき契約の血によりて羊の大牧者
るゝまこゝらの主耶蘇キリストを死よりよみがへらせ
平康をこゝりふの神三耶蘇キリストよりそのよろこぶ
とこゝろをるんぢらの心のうちまこゝ。まこゝるんぢらを
しそのの聖旨をあこゝるそせんがためにまことの善事よ
ありてるんぢらをまこゝうせゝむべゝ。榮光うれよ歸

して世々このぎりるゝうん　アーメン　二二　兄弟よいまされるんぢ
らよはゞ書あこゝりたまをこゝをゆるきん
こゝを請　二三　ゝまこゝらゞ兄弟テモテのゆるきこゝ
るんぢらあるべゝ。されゝまこゝやうよきこゝらゞとを
れとこゝにるんぢらを見ん　二四　請まことるんぢらをみち
びくものあまびまことの聖徒よ安をとゝ。イタリヤより
きこゝりものも安をるんぢらとゝり　二五　ねがゝくは恩
寵るんぢらまことのものとこゝあるんことをアーメン

THE AMERICAN BIBLE SOCIETY
米國聖書會社藏板

1409

95-91190

帝国憲法

明治九年

英国議会訳　最初の出版　同年版が
伝わっているが　これは　ボン訳が基礎となっており
英国訳としては　これが最初ということになる。